

新宿区次世代育成支援シンポジウム

平成16年5月14日(金)

新宿区福祉部少子化対策担当

午後06時35分開会

司会 皆さんこんばんは。ただいまから新宿区次世代育成支援シンポジウムを開催いたします。

私は、本日の進行を務めます新宿区福祉部少子化対策計画担当の吉村と申します。よろしくお願いいたします。

では、初めに、主催者であります新宿区より、中山弘子新宿区長からごあいさつを申し上げます。

では、中山区長、よろしくお願いいたします。

中山区長 皆さんこんばんは。新宿区長の中山弘子です。

本日は、新宿区次世代育成支援シンポジウムにお集まりをいただきまして本当にありがとうございます。新宿区は、今、少子・高齢化対策と安全・安心のまちづくりを重点施策として充実を図っております。特に少子化対策については、平成17年度から21年度を計画期間とする次世代育成支援にかかわる地域行動計画を先行的に策定する全国53自治体の1つとして昨年度素案作成に取り組んでまいりました。この計画の根拠となる法律である次世代育成支援対策推進法が今年の7月に成立しましたが、それから3月の素案完成までには非常に短期間であったために、区民の皆様と新宿区の次世代育成支援のあり方等について、十分に議論ができたとは言えません。しかし、素案をいち早くお示しできたことは、区民の皆様とともに新宿区の子どもたちをどのように育てていくのか、新宿のまちが皆様にとって子育てしやすいまちとなっていくためにはどのような支援がふさわしいのかなど、計画の内容、取り組みについて意見を交換して、また議論する時間を十分にとることができる大きなメリットがあると考えております。今後、地域懇談会等を通して、この素案の内容を1人でも多くの皆様にご覧いただき、大いに議論し、本当に区民の皆様が「新宿は子育てしやすいまちになるぞ」という実感が得られる計画としてまいりたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

そのスタートとなる本日のこのシンポジウムには、計画策定協議会の座長、副座長をお願いしております吉澤英子先生、汐見稔幸先生を初め、計画策定協議会委員の皆様にご協力をいただいたこと、心から感謝申し上げます。

また、実際に地域で子育て支援にかかわっていらいらっしゃる視点から、お三人の方に今後の新宿区の次世代育成支援についての提言をいただけるとのことで感謝するとともに、大変うれしく思っています。

また、会場には、多くの方々にこの忙しい中、こういった夜の時間にご参加をいただいております。本当にありがとうございます。会場との意見交換なども活発に行われることを期待しております。

私も、最後まで参加したいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは、簡単ですけれども主催者からのごあいさつといたします。

本日は、皆様どうもありがとうございます。(拍手)

司会 中山区長ありがとうございました。

では、続きまして、第一部の基調講演を始めさせていただきます。

「次世代育成支援計画の意義」というテーマで、東京大学教育学部大学院教授の汐見稔幸先生に講演をお願いしております。

新宿区次世代育成支援計画策定協議会で副座長をお願いしております汐見先生は、大学でお教えるだけでなく、保育、教育に関わるさまざまな研究会や講演会でご活躍のほか、子育て支援、次世代育成支援の自治体の計画策定にも数多くかかわられておられるなど、幅広い活動をされております。

また、研究者としてばかりではなく、みずからも父親として育児にかかわったご経験からの発言も多く、きょうは刺激のあるお話を伺えるのではないかと考えております。

では、汐見先生よろしく願いいたします。

基調講演「次世代育成支援計画の意義について」

汐見稔幸 東京大学大学院教育学部研究科教授

皆さんこんばんは。

新宿区という日本の都市化された社会の一つの象徴とも言えるような、ある面から見たらとっても活気のある地域、そして、大変な国際化が進み始めている地域、そういう数え上げればきりが無い新しい時代の特徴を持っている、そういうまちで子育てをしている親御さん、そこで育てている子どもたちをあらゆる角度からサポートしていく、そういうプランを一体どうしたらつくれるのか。そのことをやらないと、やっぱり子どもをもっと育てようという人たちは間違いなく増えてこないわけですし、そういうある意味では大変な難題を私たちは今背負っているわけですが、この新宿というまちで子どもを育てるのがこんなに楽しいとは知らなかった、とっても私は今生きがいを感じているというような人たちが増えてくる、そういう施策ができれば、私は日本は少し変わってくると思っています

けれども、少しでもそういうプランに近づきたい、そういうプランをつくりたいという、そういう思いでもって今次世代育成支援対策の新宿区の行動計画づくりというのを私たち急いでいるわけであります。きょうは、その中間報告のようなことを兼ねて、策定のメンバーだとか、あるいは新宿区で子育てをしていて、さまざまな思いを持っているメンバーが、その思いのようなものを少し語り合う、ということを考えているわけです。

最初に、簡単ですけども、次世代育成支援計画というのは一体どういう計画なのか、どういう意義を持っているのかということについて、私なりに考えているところをお話しさせていただこうと思っています。時間も余りありませんので、ポイントだけになると思いますけれども、幾つかあとのシンポジウムのためのたたき台になるようなお話をさせていただければと思っています。

ご存じだと思いますけれども、今、区長さんの方からもありましたように、この次世代育成の行動計画の基礎になっている法律、次世代育成支援対策推進法という法律は、実は去年の7月にできて、まだ1年たっていないわけです。そして、8月からさまざまなその法律に基づく指示が出てきたわけですけども、ともかく全国の自治体で今年度中にその自治体なりの次世代育成のプランを策定せよと、行動計画をつくりなさいということが明記されているわけです。

もともと子育て支援という施策は、もう10年以上前から日本の政治のかなり大きな柱になってきたわけです。その中心になっていた1つは、ご存じだと思いますけれども、エンゼルプランというものだったわけです。エンゼルプランが中心の子育て支援というのをしばらく続けてきたわけです。

もちろんエンゼルプランだけではないんですが、エンゼルプランというのは子育て支援のためのプランなんです、実は、その中身を見ますとすぐわかりますけれども、少子化対策のための子育て支援プランなんです。日本の政治行政の世界で、今子育てをしている世代を何とかサポートしなきゃだめだという、そういうことがテーマになってきたというのはそんなに古いことじゃないわけですが、極端に言いますと初めてのことだと言ってもいいわけですが、なぜそういうことがテーマになってきたかという大変大きなきっかけは、だんだん人々が子どもを生まなくなってきた、このままでいくと大変深刻な問題が生じるのではないかということがわかってきたからであります。現在の少子化のペースが続きますと、今世紀の中ごろには日本の人口は1億を割り始めまして、あと100年たちますと5,000万人台にまで入っていきます。今1億2,000数百万人いるわけですから、たった100

年で半分以下になるわけです。さらにそのペースが続きますと、1,000 年後には「日本人の方はこの部屋にお集まりください」と言ったら全部が集まるという、いや幻想です、1,000 年後には日本人はいないという、そういうペースで減ってくわけでありませぬ。

そういうことに気がついたときに将来の人類は何とかするんだと思いますけれども、その減り方が余りにも急速だということと、高齢化がさらに続くということで、大変人口構成のアンバランスな国になっていくわけです。

20 年後をちょっと考えてみてください。20 年後に私なんかもう 70 代の中ごろの人間になります。従来の区分でいくともう老人になるわけですが、最近、70 代の中ごろで自分は老人だなんて言っている人は余りいませんけれども、でも一応おじいちゃん、おばあちゃんの称号が張られる年代ですよ。そういう人間 私団塊の世代ですけども、20 年後に何人くらい生き残っているかと言いますと、計算すればすぐわかりますけれども、私たちが 277 万人生まれてきましたけれども、75.6 では女性はまだ 8 割は生き残るという確率が計算で、大体 20 年後に 75 歳の人間は百七、80 万人生き残っているんです。その 20 年後におぎゃあって生まれる赤ちゃんの数は大体どのくらいかと予測しますと大体で 7、80 万人です。新しく生まれた赤ちゃんが、全国合わせても 7、80 万しかいません。75 のじいさん、ばあちゃんが 170、80 万人生きていう、そういう人口構成にあるわけです。これは社会の労働力のバランスの問題にしても、大変難しい問題が出てくるわけです。その時分になりますと、私たちの会話の中身もどんどん変わってくるわけです。あいさつも「きょう会った?」「だれ」「若い人」「見ないわ」とかね、そういう会話になってくる。タクシーに乗ったら、ちょっとお年を召しているのを見て、「運転手さん何歳ですか」「私、85 よ」とか、そういうようなことがある意味じゃ当たり前になるような社会になるかもしれない。それは、笑い話で済んだらいいんですけども、実は年金問題、その他の大変深刻な問題を生じますので、国としては、この少子化が進むペースを少しでもダウンしたいというのが本音であるわけです。これは国の政治行政の中心のメンバーでなくても、私たちだって考えなきゃいけない問題です。

結局、子育てを支援しなきゃいけないというのは、ちゃんと子育てを支援しないとそうやって少子化がもっと進んでしまいうだろうというところから、実は子育て支援が始まったわけです。そうやってつくられたのがエンゼルプラン、日本語で言うと天使プラン、子どもをもうちょっと生んでちょうだいプランです。それで 10 年ほどやってきたんですが、出生率は少しは回復したのかと申しますと、この 10 年間実は見事に出生率はさらに低下し続

けたわけです。せっかくさまざまなプランを実践してきても、実は克服できていない。それを何とかしなきゃいけないということで、一昨年の4月に少子化対策のプランを抜本的に見直せという指示が総理大臣のもとから出たわけです。それに基づいて厚生労働省が、これまで指摘されてきたことをすべてもう1回整理して、なぜ少子化対策のプランが必ずしも功を奏していないのかということを検討して新しいプランを出したわけです。

そこでどういうことが指摘されたかということを中心に申しますと、エンゼルプランというのは、基本的には働く女性、働きながら子育てをしようとする女性への支援だったわけです。要するに共働きがどんどんふえている。しかも働いている女性の労働の形態は第三次産業が中心ですから何時までも必ず帰れるとは限らない。お店でやっている人もそうですけれども、夜型の労働もたくさんある。にもかかわらず保育園というところは夕方までしかやっていなかったり、夜やっていなかったりということで、実態に合っていない。だから子どもを生んでかつ仕事をし続けようとするのとどちらかを断念せざるを得ない。実際には高学歴化が進んでいますから、仕事を続けたいという人がどんどん増えてくる。そうすると子どもを生むのを断念してしまうのではないかという、そういうことで減っているということが大きいんじゃないか。しかも、晩婚化というのもある。結婚年齢が上がっているから余りたくさん子どもを生まないということもあります。そういうことがあるので、何とか働きながら子育てをしている人に対して支援しようということでやってきたわけです。もちろん、対象は保育園が中心ですけれども、その保育園に地域のお母さん方の子育ても支援してほしいということがあったわけです。あくまでも保育園中心でした。その結果、保育園のさまざまな仕事はすごく増えたとし、保育業務も拡充してきたわけです。

ところが、それで出生率が回復したかと言ったら、回復しないわけです。なぜかということ議論した結果、1つは、実は、子どもが増えない理由は、働いている女性が両立するのが大変だからということで生まないというだけではなかったということがわかってきたわけです。今まで、専業主婦と言われていた人たちは、それなりに子どもは生んでいたんです。ところが、今世紀に入って調べてみると、専業主婦と言われていた人たちが生んでいる子どもの平均数が減ってきちゃったわけです。つまり、働いている人は減ってきても専業主婦は変わらなかったと思っていたら、その専業主婦も変わってきちゃった。減ってきたんです。ということは、日本人が全体として子どもを生もうという意思をだんだん持たなくなっている。これは、国は出生力の低下と言っているわけですが、日本人は、全体として子どもを喜んで生み育てようという、そういう意欲というものが今は萎えてき

ている。これはまずいというわけです。したがって、今度は、保育園を中心とする支援ではなくて、専業主婦をも含んだ支援プランにしなければだめだという、これが1つの大きな目玉になってきたわけです。

それから、2つ目は、実は、専業主婦家庭がなぜ生まないか、生まなくなってきたかという、例えば、夫の方の帰る時間がとっても遅い。調べてみたら南関東の地域で、30歳代の男性の帰宅時間を調べたら、11時以降に帰っている人が3割以上いる。毎日帰る時間が平均で11時を回っている人が3割以上いる国なんていうのは、これはあり得ないわけです。日本ぐらいしかないです。そういう人たちがたくさんいる中で、一体だれが喜んで子育てをやるか。結局女の人だけが一人でやらなきゃいけなくなりますね。

別の調査ですけれども、30歳代のサラリーマンで300人以上の大手の企業で働いている人の年間の労働時間は大体3,000時間となっています。ドイツの平均労働時間が1,500時間を割ったということが大分前に話題になりましたけれども、日本の30歳代の大手企業のサラリーマンは、年間3,000時間働いています。250日働いているとしても、1日に12時間は働いています。そして、往復の通勤時間等を入れますと10数時間が会社にとられているんです。帰ってきて、さあこれから子育てとなるわけがないんです。

要するに、日本の社会は経済中心に動いてきて、経済の周辺にある介護だとか育児だとか、そういう問題を同じほど大事だというふうになかなか考えてこなかった。そういう考え方そのものを変えなきゃいけない。

差し当たり、働いている人の働き方そのものを見直さなければいけない。働き方を見直す言い方が大変微妙な言い方なんです。これは、実は企業に対してはもうちょっとはっきりと子どもを抱えている従業員に対しては、早く帰すとか、そういうことをやってほしいというのは実は厚労省の本音なんです。しかし、企業に対してこうなさいとなかなかはっきり言えないために、働き方を見直してほしいというように国民に呼びかけるような形になっています。しかし、実際はおれだって早く帰りたいよと、でもそういうことをやればいつクビになるかわからないという人にとっては、なかなかそうはいかないわけです。ですから、これは後で言いますけれども、企業に対しても次世代育成のためのプランを持つということが、実はこの法律に盛り込まれたわけです。

いずれにしても、日本人が仕事中心の働き方、生き方をしている、家庭で夫婦がゆったりと一緒に時間を過ごすという、それが余りとれない、そういう状態が続いている限り、子どもの数は増えようがないということがここで初めて認識されました。

それから、時間がないので簡単に言っていきますけれども、今までの常識がよく調べてみたらかなり違っていたということがわかってきたんです。

例えば、先ほど専業主婦家庭の方が子どもを生んでいて共働き家庭の方は大変だから子どもを生まないというふうに思っていたわけです。ところが、データをいろいろ集めてみますと、世界中集めてみたら、専業主婦家庭が多い国ほど出生率は低いということがわかってきた。つまり、共働き率が高い国の方が子どもをたくさん生んでいるんです。

例えば、フランスなんかは、合計特殊出生率がもうすぐ2に戻ります。今、1.9 幾つになって戻ってきました。オランダも 1.9 幾つまで戻ってきました。そういうところは、日本と比べて女性の働いている率はうんと高いですね。8割、9割です。アメリカも 2.幾つです、出生率は。アメリカの共働き率も日本よりうんと高いです。共働き率が高い国の方が実は子どもをたくさん生んでいるんです。これは、今までの私たちの考えている常識とは逆だったんです。むしろ、専業主婦になって家庭の中で一人で子育てをしなきゃいけないことになっている人たちが生まないんです。

そういうことも含めて、私たちの今まで前提とした考え方を少し全部を見直す。そして、国際的な常識というんでしょうか、それにあわせる。国際的な視点で言いますと、子どもを育てるのは、差し当たりはまず生んだ親の責任でありますし、家庭の事業ですね。しかし、子どもを生み育てるのは、実は社会の事業でもある。つまり、子育ては家庭だけに任せておいたらうまくできない。それは社会自身がみずからの仕事として担わなきゃいけない。これを子育ての社会化と国は呼んでいます。子育てを社会化していくんだという、そういうことをもうちょっとはっきりと打ち出さなければ、それぞれの家庭に「頑張りなさい」「もっとしっかりと育てなさい」なんて言っている限り、絶対子どもの数は増えないということです。このことも大分はっきりわかってきました。

その他、たくさん議論の結果わかってきたことがあって、そして、従来のエンゼルプラン中心の子育て支援を少し修正する。そして、今言った専業主婦家庭を応援する。あるいは働き方を見直す。さらには、次世代育成という言葉が出てきたのは、要するに子育てを支援するというよりも、日本人が次の世代をどうやって生み、育てていくか、その全体を私たちがちゃんと見守ろうということで、だから、例えば、小学生に今度は親になっていく準備をしてもらおう、そのために小学校から家庭の中でごはんをつくるということとはとっても大事でおもしろいことだということを経験してもらおうということで、食育というのに思い切り力を入れようとか、中学生、高校生に幼稚園、保育園に行って保育を経験し

て、そこで子どもとかかわるといふことの面白さをしっかりと体験してもらおう。これをどこの自治体でも全部進めてもらおうとかという総合プランになっているわけですが、それは結局、次の世代を生み育てるといふことを国民総ぐるみでサポートしていこうというプランにしたい。要するに子育てを支援するといふだけではないんだといふ、その思いなんです。そこで、次世代育成支援計画という名前がついたわけです。

この次世代育成支援計画の特徴ですけれども、簡単に申し上げます。

大きく、何点もあるんですが、差し当たりここでは私は4点だけ申し上げます。

1つは、子育てにかかわるセクション、行政のセクションといふのは実はたくさんあるわけです。国もたくさんあって、そしてお互いが十分連携をとらないまま縦割りでやってきているわけです。この縦割りの弊害をできるだけ克服しようといふのが今回のねらいの1つです。ですから、次世代育成のプランの中には詳しく読めばわかりますけれども、7つの柱があるんですが、この7つの柱といふのはそれぞれの役所に対応しているわけです。

例えば、母子保健のセクションとありますね、それも当然入ってきます。それから、福祉のセクションがあります。それから、教育委員会、それから社会教育といふ、そういうセクションもあります。さらには、国土交通省だとか、そういうところで交通安全だとかそういうセクションもあります。要するに子育てにかかわるようなさまざまなセクションの仕事が全部一元に入るようにする。全部同じ傘に入るようにする。そういうことをねらったプランであります。そういう意味で総合プランだといふことです。

それから、2つ目は、住民が参加してつくらなければいけないプランだといふふうになっています。

なぜかと言いますと、先ほどもちょっと言いましたけれども、これまでのエンゼルプランといふのは保育所を中心とするプランですから、ある見方をすると点のプランなんです。点と、もうちょっと広げても線のプランだったんです。ところが、専業主婦が対象となりますとすべての地域になります。ですから面のプランにならなきゃいけないわけなんです。点と線から面のプランです。面のプランとなればなるほどそれはすべての地域でさまざまな人が子育て支援に参加していかない限り行政の人間だけでできるわけがないのです。それから、地域住民の相違をありとあらゆる相違を引き出して、そしてその考えだとか、何かを尊重しながら新しい支援のあり方をつくっていかなくちゃいけない。プランをつくる時に住民が参加するのはもちろんです。その後担う人たちとして住民が登場しなければうまくやっていけないといふ、そういう行政と地域住民の新しいコラボレートといふも

のを実現しなければ、多分実現できないだろうという、そういうことをうたったプランなんです。私は、これが実現すると社会のあり方は少し変わり始めると思っています。

それから、3番目には、普通プランがつくられたら、そういう報告書を出して、あとは行政側がその計画を少しずつ予算に盛ってやっていくというやり方ですけども、今回は、10年計画なんです。5年後に見直しなんです。そういう意味で、その計画がきちんと遂行されているかどうかをチェックする機関をつくってよろしいということになっているわけです。10年間ですからかなり集中してやらなきゃいけません。しかし、最初につくったプランが本当に具体化されているのか、やってないのはないのかということのをそれをきっちりやっていかなければせっかくつくったプランが生きてきません。それをちゃんとチェックする機関をつくってよろしいということが初めから盛り込まれた法律なんです。ぜひ新宿でもやってほしい。

それから、4番目は、企業が同じような行動計画を持たなければいけないということを書いてあるわけです。したがって、企業の子育て支援と自治体の子育て支援が初めてコラボレートする。

例えば、企業の中で子どもを生んだ従業員がいたとしますね。そうすると、その父親はちゃんと子育てをやりなさいと、働きながらどうしたら上手に父親が子育てできるかを企業の中でちゃんと訓練しよう、企業の中で子育ての教育をしようといったときに、企業にはそういう人材がいなくてもいいかもしれない。そのときに、自治体と相談したり、あるいはNPOと相談したりして、そうすると「じゃあ私たちが出かけてやります」というようなことがやれるとか、あるいは、例えば、新宿区で子どものためにNPOとかいろいろ活躍しなきゃいけません、なかなか基金がない、金がない。そうすると、新宿子ども基金というのをつくろうということで呼びかけて、その基金に企業がどんどん寄附をする。寄附をした企業の商品はみんなで買おうということで、そういう運動をやるとか。しないところはべたべたと張っていくとか、そういうことで こんなことは別に書いていませんけれども。要するに企業と自治体子どもを育てるときに初めてコラボレートをしていこうということをやろうとしたらできるということです。そういう特徴、その他ありますけれども、を持った法律なんだということでもあります。

実は育成支援計画がうまくいった、なかなかうまくいったという、そういう評価をもらうためには一体どういうことが実現しなければいけないのか、そのこともあらかじめ考えておかなければいけないと思います。

私は、この次世代育成がああうまくいったという一つのメルクマールは、5年後にこの新宿の子どもたちの出生率が回復し始めて、5年後には、今よりもかなり高い数字の出生率が出てきたというふうにならないと成功であったとは言えないと思っています。

さらに、新宿でプランをつくるというときには、独自の課題、あるいは新宿らしさというものを実現していかなければいけないと思っています。それができるかどうか成否の中身になっていると思います。

新宿というまちは、さっき言いましたけれども、本当に都会型の典型のようなまちです。昼間人口と夜間人口は全然違うという問題があります。一体だれに対して子育てのサービスをするのかと、こういう問題もあるわけです。

それから、外国人がたくさん住んでいる居住地域がありますね。そういう地域の子育て支援というのを一体どうするか、大変きめの細やかなことが出てきます。やはりこの近所の、あるいは区役所のそばの歌舞伎町地域だとか、夜遅くまで働いている人たちがたくさんいるような地域、そこで一体どういう支援をすればいいのか。そういう意味では、新宿ということで一つにくくるんじゃなくて、それぞれの地域特性というものを考えたきめの細やかな支援プランをつくらなければいけません。そういうことが実現できるかどうか、これも成否にかかっていると思います。

それから、NPOと言いますか、民間の子育て支援団体だとか、任意団体とか、そういうところがたくさん参加して一緒になって動いていかないとさっき言った面にはならないですね。そうだとしますと、NPOだとか任意団体と行政との新しい関係、いい関係がつかないと多分やっていけない。現在、詳しくは省略しますが、あちこちでNPOできています。子育て関係のNPOも3,000ぐらいできているんですが、全国的に。しかし必ずしも行政といい関係をつくるとは限らない。下手をすると行政が、そういう人たちを手足として使っているだけだということです。中でぶうぶうぶうぶう言われているという、そういうことも起こっています。一体NPO、あるいは市民と行政のお互いがコラボレートしていくいい関係というのは一体どういう関係なのか、これを私たちは模索しなきゃいけない。これも成否のかぎを握っていると思います。

そして最後に、子育てというのは、ある意味では最も日常的な営みですね。したがって、こういうプラン、何とかプラン、何とかプラン、何とか事業というのがあればうまくいくというほど簡単なものではないのです。子育てという世界というのは、ある意味では人間性がすべて出てきます。私がどう育ったのかということも全部出てくるわけです。したが

って、Aという人にうまくいったやり方がBという人にやってもうまくいくかと、これも限らないわけです。そういう点では大変きめの細やかで人間的な配慮の必要な支援になります。そのために、絶えずこういうやり方をやったんだけどもどうもうまくいかなかった。でもこういうやり方やったら随分喜んでもらえたとか、目の輝きが違ってきたとか、そういう情報をしょっちゅう集めては修正していく、集めては修正していくという、微調整をしながら修正していくようなシステムがつけられなければ、最初につくられたプランで行っても5年たてば多分それはもう機能しなくなっているというような微妙な世界なんです。そういうフィードバックしながら微調整できるようなシステムをどうつくり上げていくか、これもまた次世代育成の成否を握るポイントだと私は思っています。

いずれにしても、たかが子育て問題なんですけれども、されど子育て問題で、これをうまく位置づけていきますと、日本の行政の新しいあり方、あるいは地域づくりの新しいあり方の小さなモデルが切り開かれる、そういう大切な課題だと私は思っています。そういう意味で、ぜひ皆さん方の積極的なご参加をお願いしたいと思います。

以上、私の話を終わります。(拍手)

司会 汐見先生ありがとうございました。

汐見先生には、引き続き第二部のアドバイザーとしてお残りいただけることになっております。

では、この後、第二部の新宿区次世代育成支援の提言に移りますが、準備がございますので、そのまま少々お待ちください。

第二部 シンポジウム「新宿区の次世代育成支援への提言」

司会 では、第二部の新宿区の次世代育成への提言に入りたいと思います。

コーディネーターは新宿区次世代育成支援計画策定協議会で座長をお願いしております吉澤先生です。

吉澤先生のご専門は児童福祉、グループワークでございます。大学で教鞭をとられるかわたら、長く地域において児童家庭福祉活動及び児童館活動の研究、研修などにご活躍されていらっしゃいます。

では、ここから先は吉澤先生に進行をバトンタッチいたします。吉澤先生よろしく願います。

コーディネーター（吉澤） 最初だからちょっと立たせていただいてごあいさつをしたいと思います。

吉澤でございます。

第二部でお休みなく汐見先生は、ここにまたおいでいただいておりますけれども、すぐ続けさせていただきたいと思います。時間というのはもったいないですから、有効に使わせていただくというふうに思うわけでございます。

さあ、ここからそれぞれの発題をしていただきますが、提言になりますが、まずちょっとそれぞれのシンポジストの声も聞かなきゃいけないので、一言どこのだれべえですぐらひは言っていただこうと思います。それが済んでからそれぞれの提言に入りたいというふうに思いますので、よろしくどうぞ。

それでは、どうぞ。端からやっていただきますでしょうか。

はい。

岡崎 こんにちは。新宿子育てを考える会から参加させていただきました岡崎淑子です。

私は、自分も新宿の保育園を出ている卒園児の一人なんですけれども、きょうは、現役の保護者の立場からということでお話しさせていただきたいと思います。よろしくお願ひします。（拍手）

工藤 こんばんは。信濃町にあります二葉乳児園という施設がありますが、その2階で現在地域子育て支援センターをやっております工藤と申します。

私自身が今次世代育成の実践者としてやっているということで、現場からの声ということできょうは発言させていただきます。よろしくお願ひします。（拍手）

石井 こんばんは。東京Y M C A社会体育・保育専門学校という保育士の養成校で教員をやっております石井と申します。

今回、北山伏の子育て支援協働モデル事業というものにファシリテーターという立場で参加させていただいていますが、一メンバーとして、私も2カ月後には初めての子どもを持つ身として、父親的な立場で参加させていただいています。きょうはよろしくお願ひいたします。（拍手）

コーディネーター（吉澤） ありがとうございます。

では、汐見先生は今お話しいただいたから略させていただきます、汐見先生からの先ほど子育て育成の意味というようなことでお話しくださいます、最後に4つの一つの課題提起みたいな形、あるいはこれからのというのでお話がございました。それにかかわり

を大変深く持つ意味で今ご紹介くださいましたお三人のシンポジストの方々に大変時間もったいない、もっと長くあったらいいなと多分そう思うであろう、思うであろうでございますが、お話をさせていただこうというふうに思います。

「子育て」という言葉はありますけれども、子どもはいかに育つかという「子育て」という言葉をこのごろございますね。そこら辺の課題も含めながら、お話をちょうだいできれば幸いかなというふうに思います。

今、自己紹介では向こうからこう来た。今度は反対からお話をさせていただきます。

どうぞよろしく。座ったままでどうぞ。

提言1 区民と区との協働でつくる子育て支援実践中

石井章仁 東京YMCA社会体育・保育専門学校教員

では、早速始めさせていただきます。

先ほども申し上げたとおり、私は東京YMCA社会体育・保育専門学校という専門学校で教員をしております石井章仁と申します。

今回は、現在私がファシリテーターとしてかかわらせていただいています北山伏子育て支援協働モデル事業の経過について皆さんに現在までの流れをご報告いたします。

(パソコン画面をスクリーンに投影)

今回は、この事業では全6回のワークショップを開きまして、住民の方を中心に参加していただきまして、ともに子育て支援の事業の中身を考えていこうという協働事業のスタイルをとっております。このワークショップでは、次のような流れで現在まで全4回のワークショップを開いてきました。

まず、本年の1月に企画会議というのを行いました。企画会議というのかたいんですけども、実は出会う、つながる会といたしまして、握手という歌を新宿区長と一緒にレクリエーション等々もしながら歌遊び、あとはエントリーカードに何を書いてきて参加したのかということをごみんなで話し合いました。

それで第1回目、第2回目、第3回目、第4回目と、現在まで進行しております。

第1回目は、目的は何だろうとか、利用者はだれかなとか、内容はどんなものかという内容で話をしました。

第2回目は、東京家政大学の新沢先生に講演をいただきました。

第3回、第4回で、活動の内容についてちょっとグループに分かれて話し合いました。

第5回、第6回は、来月になります。

そして最後、発表会というのがあります。ここで一応事業の全容が発表できると思います。

次のシートなんですけれども、参加者のエントリーカードの内容です。皆さんいろいろな希望とか計画、意欲などを持ってこの会に参加されていました。中にはグッズの販売ですとか、夜の子育てスペースとか、いろいろユニークなものが多くエントリーカードに書いてありました。

グラフにするとこんな感じになります。下の5つぐらいが最も多かった内容です。一番下が各種相談事業です。下から2番目が広場とかサロン。3番目が育児講座、そして一時保育、あそび、子ども向けの講座みたいなものが特に多かったです。そのほか母親の起業ですとか、情報発信、また、親子カフェですとか、障害を持っている子どもが集える広場ですとか、いろいろな意見が寄せられました。

ワークショップの方法なんですけれども、初期の段階では固定しないグループで、そのうちにだんだんと固定したグループで討議をしました。グループに分かれて話し合っ、最後に発表するというので、出された意見を皆さんで共有するようにしました。

まず、第1回のワークショップから説明させていただきます。

第1回のワークショップでは、何のためにやるんですかということ。あとは、実際にこの施設を利用する人はだれですかということ。あと、私たちは何ができるのですかということ。そして最後に課題とか不安なことはありますかということ固定しないグループで話しました。

紙面からちょっとご紹介したいんですけれども、ありきたりのことだと思うんですけれども、真ん中にお父さん、お母さん、あとは子どもがいて、地域のお兄さん、お姉さんです。実は商業高校や中学校、小学校が近くにいます。あと、おじいさん、おばあさん、閑静な住宅街なので結構あります。地域の人が困むわけです。お店、子育ての団体、ボランティア、関係する人すべて、行政なんかもそうですが、それが周りからサポートしていけるような広場になればいいと。行政がつくっている子育て支援センターや社会福祉法人などが運営している支援センターと違うのは、子育て中のママとかパパの視点、あるいは子どもの視点でそういう支援ができるのではないかとということが皆さんの意見から寄せられたわけです。

次、対象者、利用者、本当に利用する人はだれなのかなということで、これ先ほども出

ましたが、子育て中の家庭であるとか、子ども、親、こうした人たちが当然利用するわけ
です。

第2の利用者として、支える人です。これは我々のことなんですけれども、そういう支
える人がいます。実は利用しながら支える人、支えながら利用する人なんていうのも意見
で出まして、こういう双方向の支援ができるんじゃないかというのが皆さん寄せられまし
た。

次に第2回のワークショップなんですけれども、新沢先生に講演をいただきました。

そこで、先生からの北山伏子育て支援事業に期待することと、こんなことを今後考えて
いったらどうですかというアドバイスをいただきました。まず、中心となる人ですね、リ
ーダーについて。そして、ひろばを中心として連携性を持った場所にしていくということ。
そして、参加する我々メンバーが共通の目的、そして共通の理念、そして課題を共有する
ということです。それをした上で新宿区の地域ネットワークの核になる場所になればいい
んじゃないかということ。あと、ちょっと住宅の中にあるんです、場所が。すごい静かで
閑静な住宅街の中にあるんですけれども、ちょっとわかりづらい場所にあるということも
あって、遠くても来てみようかと思わせるような内容、プログラムを考えることも必要で
はないかというご意見をいただきました。

さて、第3回、第4回、これは4月、5月になりますが、今度は内容を考えました。

まず、第3回目には大まかな活動の内容を出し合いました。この段階では、イメージや
大まかな活動の内容が出まして、第4回目には具体的な活動の内容として、だれが実際や
るのか、あとは、これは北山伏保育園になるんですけれども、どの部屋を使って、どんな
ものを使うかと。物、場所。あとは何時から何時まであけるのか。僕たちのグループは何
時から何時までやるのか。講座は月に何回やるのかというところを各グループであげてみ
ました。そして、これが現実問題なんですけれども、経費はどのぐらいかかるのかとか、
ここまで考えてみました。

各グループの代表者が集まりまして、運営会議、代表者会議というのをしております。
そこで、ある程度どんなものにしようかという話し合いが行われています。イメージでは、
広場を中心に、この広場というのは遊び、ふれあいの広場、あと学び合う広場、育て合う
広場、分かち合う広場、支え合いの広場という5つなんですけれども、核となる事務局み
たいな運営体をつくりまして、相談ですとか、講座、プログラム、あとはカフェ、情報発
信、そして保育もできたらいいなことなんですけれども、こんなイメージでやって

いこうということになっております。

次なんですけれども、各グループ、左の方ですね。活動グループとして、今広場グループ、あとは相談グループ、情報グループ、講座グループ、カフェグループ、こんな5つに分かれて考えているんですけれども、こういうグルーピングがいいか悪いかというのはわかりませんが、実際、こういう形でと考えております。

先ほども申したとおり、そこの代表が代表者会議で集まりまして、次のワークショップの運営ですとか、組織についてですとか、運営の方法ですとか、発表会、7月の発表会どうしようかとかいう話をしております。そのほか、施設の改修なんかも行わなきゃいけないので、改修に関するタスクチームのようなものをつくったり、事前企画として、プレ遊び場みたいな企画もしていこうという意見が寄せられております。

課題や不安というのはたくさんありまして、10月から事業がスタートするわけなんですけれども、10月以降もこれはどんどん考えていかなきゃいけない問題だと思います。事業の内容の問題だったり、組織の問題だったりします。あと、利用者が本当にどれぐらいいるのかというのがまだ未知数であるということ。あと、責任の問題ですとか、あと中心となる人、スタッフなんかは本当に回るのだろうか。また、予算や経費なんかどのぐらい続いてくるのだろうかというのが皆さんから挙げられた課題や不安です。

先ほど7月の発表会の話をしました。発表会に向けても今後考えていくわけです。発表会の方法ですとか、イベント形式にしようかという案も出ております。実際、参加してくださった方にどういうふうに伝えたらいいのかというようなことを今後考えていかなくてもいけないのではないかと出ております。

7月27日が一応締め切りなんですけど、まだ実は名称とか愛称が決まっていらないんです。募集しておりますので、今回、ここに参加されている方で、もし夢の持てるようなすてきな名前をありますよという人がいらっしゃいましたらどんどんこちらに教えていただければうれしいなと思っております。

最後に、まとめなんですけれども、こうした協働事業という形式のものは、今後、各自治体ではやりのスタイルとなっていくものだと思います。ですが、実際やってみると、なかなか大変なことが多くあります。理想です。言うはやすしと僕は思うんですけれども、とにかく理想と現実とのギャップにはさまれる、これは参加している方もそうなんですけれども、区の方もそうだと思います。私もそうだと思います。挟まれていると皆さん思っているんじゃないかなと思います。例えば、予算のことですとか経費のこと、あとは規制

のことなんかもあると思います。ただ、参加していただける方、これから参加どうしようかなと考えていらっしゃる方には、ぜひ前向きに考えていただいてかかわっていただけたらいいなと思います。そして、区の方にも協働ということで区の方は黒子に徹していると思っていらっしゃると思うんですけども、あくまで住民主体のものとして本当にサポート役に徹しきっていただきたいなと、今後も思います。

参加者の方々もさまざまなバックボーン、背景等を持っていらっしゃる。あとは、さまざまな思惑を持って参加していらっしゃる。あとは、さまざまな子育て観とか、子ども観なんかを持って参加していらっしゃるわけです。そういうしがらみとか思惑を捨てて、子育て支援の共有、これが一番難しいかなと思いました。でも、我々は法人にできない、あるいは行政主導の支援には決してできない。当事者が主体となっている地域にふさわしいコミュニティの力を生かせるような事業、それが可能だとは思っております。今後、よりよきものをつくるよう、もっと参加者とともに力を合わせてやっていきたいと思っておりますので、温かく見守って、ぜひぜひ利用していただけたらと思います。

本日はご清聴ありがとうございました。

以上で終わりにさせていただきます。(拍手)

コーディネーター(吉澤) ありがとうございました。

いろいろ実践を通して、いろいろな課題、まだまだおっしゃりたいことはあるように伺いますけれども、いずれまた後ほど少しやりとりの中でしていただきたいと思っております。

最後に協働という言葉の中で、行政と住民との関係づくりという、これ大変難しいことで、それを地で行くというところを今やって、まだ途中でございますかね。どうぞお出かけくださいというお話ですが、皆さんももし区民の方々が参加できたら一緒にいただくことを期待したいというふうにも思います。

それでは、すぐ続きまして、工藤さん、お名前が有子とおっしゃいますか。育てるという字ではなかったですね。どうぞ、実際におやりになって、こちらは今度は施設という場の中でおやりになっていらっしゃる1つの活動でございます。どうぞ。

提言2 支援が届きにくい家庭へのサポートのあり方

～地域子育てセンター事業・子どもショートステイ事業から見えてくること～

工藤有子 「ふたばひろば」地域活動ワーカー

先ほど自己紹介しましたがけれども、私は、乳児院に所属していますけれども、昨年4月

より新宿区から子育て支援センター事業を委託されまして、そちらの責任者として1年ちょっとほど広場等を中心とした活動をやっております。

地域子育て支援センターをご存じない方もいらっしゃると思いますけれども、きょうは時間がないので簡単に事業概要だけお話ししますと、大きく4つの事業をやっております。

1つが、子どもと家庭に関する相談事業。

これは発達相談とか、育児相談とか、ひろばでの立ち話相談から始まって予約をとって臨床心理士の者がちょっと専門的なご相談を受けるということまで幅広く受けております。

それから、子育てサークルの育成支援という事業をやっておりまして、これは具体的には、さっきのお話の中でも講座というのがありましたけれども、私どもの方で親子講座というのを実施しておりまして、その中でお母さんグループづくりの具体的なお手伝いをしたり、あと年に2回ほど子育て相互支援旅行というのを企画しておりまして、旅行に行く前にグループワークを何度かやって、そして旅行に行くというような形でお母さんたちのグループの力をちょっとぎゅっと濃く、深くなってもらうというような仕掛けを考えて実践したりしております。

それから、3つ目は、子育て支援に関する情報の提供ということで、ベビーシッター等やファミリーサポート、保育園や幼稚園といったようなことの情報提供ということと、最後に「ふたばひろば」というホールがございまして、そちらの方でお母さんたちといろいろな遊びをやったり、相談をやったりというようなことをやっております。

さて、きょうの私のテーマ、支援が届きにくい家庭へのサポートのあり方ということなんですけれども、こちら、こういうサポートのあり方がありますという提案ではなくて、実は、1年活動してきた地域子育て支援センター自身、私ども自身の課題でして、1年間やってる中で本当に支援の必要とする家庭に私たちはアプローチしているのだろうかという、自分たちへの問題提起のようなかたちで今日はお話しさせていただきたいと思いますが、ちょっとこのような高いところでしゃべるのが初めてなので、話がちょっとそれてしまうかもしれませんが、もう少々時間をいただきたいと思います。

保育園さんに通っているとか、幼稚園さんに通っているご家庭というのは、ある意味では地域社会の中につながっているという意味で援助が届きやすい、SOSがキャッチされやすいご家庭だと思っておりますけれども、そういう意味で、家庭で育てている未就園のお子さんたちというのがやはりある意味では地域社会との交流がなかなか難しく援助が届き

にくいいわゆる密室での育児と言われますけれども、そういうご家庭になるのかなと思います。

私どもが子育て支援センターを始める前に、地域の中にどれだけお子さんたちがいるんだろうということがちょっと疑問でして、隣が保育園なんですけれども、そこにいらっしゃるお子さんたちは見かけるんですけれども、なかなか道端で子連れの方に会わない。ここで支援センターをやったら隣接の区の千代田区とか、港区とかのお子さんの方がたくさん来るんじゃないかしらということで、どんな方たちが来るのかなと思って仕事を始めたわけなんですけれども、ふたをあけますと、どこからやってくるのか、たくさんの子連れがやってきてくださいますと、皆さんが口々にこういう場所が本当に欲しかったと。早くこういう場所ができればよかったと言って、大きいお兄ちゃん、お姉ちゃんがいるようなお子さんですと「ああ上の子がいるときにもあったらよかったのに」なんて言っていたいておりまして、本当にこういう事業を委託していただいた新宿区の方にはお母さんたちを代表してお礼を言いたいぐらいなんですけれども。

そうではあるんですけれども、やはり地元で長く生活している方は別として核家族とか、転居してやってきて家庭をつくらうとしている人たちにとってはなかなか地域社会というのは入り込めないというような意味で、ひろばというのは本当に保護者同士のつながりをつくる場として本当に必要だなというふうに思っているんです。

では、私どもの施設に来ていらっしゃる利用者の傾向はどうかというと、当初は、ひろばの目的、意義の中には、いろいろなものがありますけれども、その1つに虐待の予防ということで、密室での育児をしなくても済む、お母さんたちの居場所づくりが必要だということで、という目的があるわけなんですけれども、では、いざ私どもが施設を始めまして、どういう方が来ているかというと、非常に子育てに前向きで、子育てを頑張っているという親御さんが大変多いんですね。育児相談とかもたくさん受けますけれども、どちらかというと、もう少しお母さんが時間をかけて待っていると解決するような問題で割とくよくよ悩まれているというようなケースが大変多くて、余り深刻な相談は受けていないんです。

もちろん、問題のないところに無理に問題をつくったりするという必要はないんですけれども、新宿区の次世代育成支援に関する調査結果等でも、三、四カ月の親御さんの4人に1人、それから1歳半の親御さんの5人に2人は、子育てに困難を感じているという調査結果が出ているんですけれども、余りそういう方と私どもが現場で、そんなにたくさん

出会うことがないので、非常に楽しく子どもたちの成長を見守りながら、私自身は本当に乳児院で仕事をしている中で一番楽というか楽しい仕事をさせていただいているんですけども、実は、何か私どもがまだ出会ってない方の中で援助を必要としている方が埋もれているのではないかと、あるいはにこにこひろばに来てはくださっているんですけども、そういう方の中に本当は抱えていらっしゃるんですけども、私どものアプローチが余りよくなって、そういうことを打ち明けていただけない方はいないのかということが大変気になって、今回のテーマが自分たちの課題だというふうに常々言っておりました。それで今回こういう場でお話をするときのテーマとしてこういうもので話してくださいということになったんだと思うんですけども、とにかく、調査の実態と、今、私が仕事でやっている、地域性というのもしかするとあるかもしれないんですけども、どこかに支援が必要な方がいて、そこへのアプローチができていないのではないかとというような焦燥感というか不安というか、気がかりを持ちながら日々仕事をしております。

幾つかちょっと現場での体験のお話をさせていただきたいんですけども、ちょっともう時間も押しているんですけども、乳児院ではショートステイという事業を新宿区から受けております。最近、ひろばを利用している方のショートステイの利用がふえているという乳児院の担当者の話があるんですけども、これは、まず、ひろばでの相談でショートステイという制度を知られる方がふえてきたということも1つあるかと思うんですけども、ひろばを利用するというステップを踏んで、人に子育て支援をしてもらうという、してもらってもいいんだという、心理的な障害を1つ乗り越えることで、ひろばの利用、さらにステップアップしてショートステイもじゃあ頼んでみようかしらというようなことがあるのではないかなというふうにちょっと感じています。同じ建物の1階と2階で乳児院の生活に触れることは一般の方はほとんどないんですけども、ひろばを利用しながら何となく乳児院というもののイメージとか雰囲気を感じていただいて、預けてもここならいいなという安心や信頼をつくって持っていただくことで利用することが可能となっていくのかなと。あるいは実際にショートステイを利用した方が、ひろばでほかのお母さんたちに私この間預けたのよみたいな話をしたりする中で、また新しい理解が深まったりしているのかなというふうに感じています。

逆に、乳児院の立場から言うと、なかなか援助の難しい、本当はちょっと母子分離をして少しお母さんが休息をとって立て直しをして、もう一回子育てにチャレンジした方がいいなというような方でもなかなか赤ちゃんと離れられない方って多いんですけども、例

えば、こういうショートステイという形でトライアルをすることで、乳児院に預けるとい
うこともやりやすくなるということがあるのかなと思っています。

だから、ただ、制度があればいいということだけではなくて、そこは人を通した信頼関
係とか安心感とか、そういうものを媒介として援助がつながっていきやすくなるというこ
とがあるのかなというのがちょっと感じております。

また逆に、従来乳児院でお預かりをして、退所した後アフターケアということもやるん
ですけれども、なかなかまた再び乳児院に足を向けるというのはよっぽど深刻な事態にな
らないお母さんたちも思い切ったことができないんですけれども、ひろばがあることで、
ひろばにお子さんを連れてきて遊びに来るといような形で、相談を地域の一人として、
乳児院の入所児童の親ということではなくて、地域の一人として遊びに来れる。実際、養
子縁組の里親さんのところをお願いしたお子さんなんか、割とお願いするともうそれっ
きりというケースが従来は多かったんですけれども、最近はひろばがあることで、そこに
遊びに来ていただいて、その後のお子さんの姿を見せていただいたり、ちょっとした子育て
での相談をして帰られたりということもありまして、そういうことも乳児院にひろばがで
きてちょっとよかったなというふうに思っております。

ちょっと話が乳児院の方にずれてしまったんですけれども、私としては、ひろばにして
遊びに来てくれれば支援の第一段階は突破かなと思っているんですけれども、なかなか乳
幼児は移動が大変ですので、近場じゃないとなかなか、さっき遠くても行ってみようかな
という話があったんですけれども、やっぱり遠いとなかなかおっくうだというのも一方で
は現実でありまして、いい場所であっても、1回は行ってみるんですけれども、頻繁に利
用するということになると、やっぱり赤ちゃんを連れて大変だという声はよく聞きます。

ちょっと最近、私、牛込保健センターさんの取り組みで、ふれあいサークルというのを
なさっているんですけれども、そこにちょっと出張させていただきまして、「ふたばひろ
ば」のミニ版みたいな、親子講座のミニ版みたいなのをちょっとさせていただきました。
その体験から、ちょっと今は私どもは現在の地域子育て支援センターという場所を中心に
活動しておりますけれども、将来的には、そういう活動を出張してやっていくというこ
とも必要なのではないかなと。やっぱりいいメニューであっても、それが利用しやすいも
のでなければ意味がないというか、利用者の人にとってはないも同然ということがある
と思うので、施設はやはりそういうものをどんどん開発していくことも今後は必要な
のではないかなというふうに感じています。

本当に時間がちょっと押しているんですけれども、最後に、施設は日々努力をしているいるなことをやっていかななくてはいけないんですけれども、施設や関係機関の努力だけでは限界があって、地域の中でお子さんを連れの方へちょっと声をかけ合えるような、そういう地域になっていけばいいなと思っています。

この間、うちの乳児院で北村トシコ先生という方の講演会があったんですけれども、そのときにサザエさんのお家の話がありまして、その中で、タラちゃんが三輪車ででてけてけて地域の中を走っていくだけども、そのときに、酒屋さんのお兄さんが声をかけてくれたり、隣のおじいさんが声をかけてくれたりして、サザエさん全然育児してないんですよと、北村先生はおっしゃるんですよ。でも、お母さんがそんなに育児に熱心にやっていなくても、地域のそういう見守りの目があることで、サザエさんはすごく子育て大変だときっと思ってないと思うんですよというふうなお話をちょっと伺いまして、まさにそのとおりだなと感じまして、地域と施設と、それぞれが子育てに目を向けていく必要があるなと思っております。

1つだけちょっとこの新聞の投書だけちょっと最後に、きょう関係機関の方も多く来ていらっしゃるということであれなんですけれども、そういうことをやっている中でちょっと私が大事にしていることは、虐待とかが最近もうすごくみんな敏感になっているので、ちょっと何かあると虐待じゃないかしらというふうに、ちょっとつい……というか、そういうアンテナも必要なんですけれども、アンテナを張りつつも温かく見守っていくことがすごく大事だと思うんですけれども、あるお母さんがこういう投書をしています。

母親として成熟していく過程で、周囲の人々が大きな力となってくれることが多々あります。

最近虐待という悲しいニュースが多いせいか、力になってくれるはずの周囲の人々からまるで見張られるかのような視線を感じる場合があります。そんなときは悲しくとまどいます。見張るのではなく見守ってほしい、困っているときは少しでいいから手を貸して欲しい。疲れているときは一言でいいからやさしい言葉をかけてほしい。それだけで多くのお母さんは救われ、子どもにぬくもりを分けてあげるゆとりが生まれると思うのです。

ということなんですけれども、そういう温かい目を施設も、地域の皆さんも一緒に見守れる新宿区になっていければいいなということで私の話を終わらせていただきます。(拍手)

コーディネーター(吉澤) ありがとうございました。

施設の話も出てまいりましたが、地域社会で子育てとていうのにいろいろな資源も活用するということの意味もちょっと含まれていたかと思います。

では、時間もだんだん迫っておりますので、最後に岡崎さん、よろしくどうぞ。

提言3 ここが足りない 新宿区の子育て情報

～挑戦「子育て真っ最中だからこそ」の情報発信～

岡崎淑子 新宿・子育てを考える会

岡崎です。よろしくお願いします。

今週は区が幼保一元化というのを発表されまして、すごく動揺をしている保護者の一人なんですけれども、きょうの新宿子育て考える会という会につきましては、本日お配りしていると思うんですが、ご案内のチラシの方をごらんいただきたいと思います。

私たちは、この新宿でごく普通に働きながら子育てをしているという者の集まりなんですけれども、通信の発行であるとか、ホームページなどで情報を発信したりイベントを企画したりという活動をわいわいと楽しみながらやっています。この活動の中からこの3月に保護者の目から見た保育園ガイドということで「しんじゅく保育園探検隊」という冊子を発行することができました、見えますでしょうかね。これは一見これから保育園を探そうとしている方たちのためのものというふうにとらえられがちなんですけれども、実は現役の保育園の利用者のために情報をとということで、私を含めまして現役の保護者が、ほかの園はどうなんだろうとか、もっと保育園のことを知りたいという思いから2000年ごろからの取材を始めまして、通信の方にコーナーとして掲載してきたものを集約できたものということになります。これが結果として、これから保育園を探そうという方たちのためのガイドにもすごく活用していただけるものになったというふう考えております。

私も長男が生後3カ月のときから保育園を利用しまして働いてきているんですけれども、特に小さいうちは、朝登園しますと「夕べうんちがこんなに緩かったんですけれども先生どこか悪いんじゃないでしょうか」とか、「寝つきが悪くて困っちゃうんですけれども」といったようなことを毎朝のように相談させていただいて、すごく心強く思いました。そして、もう今下の子も1年生になってしまったので、保育園には行っていないんですけれども、今でもとても感謝しています。

ですが、こういったことというのは、園によって、また先生たちのメンバー構成によっても全然違うんだなということを引き越しに伴った転園などでいろいろな園を経験するこ

とで感じてきました。

今、新宿の公立園で3月に2つ統廃合されてしまったので今 28 園ということになると思うんですけども、一言で公立園と言っても、例えば落合と早稲田という地域では、やっぱり地域性も全然違いますし、お散歩なんか一つをとっても、片道 40 分かけてよく遠出のお散歩を頻繁にしますという園があったり、または園周辺を子どもたちとお散歩マップをつくって探検隊風を楽しんでいますという園があったりというように、お散歩を一つとっても全然様子が違うとか、カラーが違うということがわかってきました。

そういう意味でも、情報の収集に当たりましては、まず現役の保護者の方たちから話を聞いていこうということにかなりこだわりました。そうするとおもしろいくらいにいろいろな情報を聞かせていただくことができまして、例えば、「うちの園の運動会では、お父さんたちが手づくりをしたおみこしを子どもたちがかついで、また、町内会にもかついで繰り出したんですよ」とか、「園庭でキャンプごっこをしますよ」という園があったり、「父母会が企画をして、弦楽四十奏のコンサートをやりました」なんていうすごくいろいろな情報も聞くことができまして、それをまた、「珍しいですね」とか、「初めて聞きました。そういったことはほかの園でもぜひやってもらいたいですね」と言ったような感想を伝えますと、「ええ？ほかの園ではやってないんですか」というふうに、実際の利用者の方も今まで当たり前だと思っていた自分の園のことが、これは実は自分の通っている園の特徴だったんだといったようなことをときにはじーんと涙なんかも流しちゃったりしながら知っていくというきっかけにもなりました。

私たちは、公立園以外は実際に足を運んで園の方で実際に目で見て、園長先生にもお話を伺ってということでこちらの方はそのように取材をしていきました。

あとは公立の場合では、保護者の方からの情報が足りないと言った場合には、そのようにさせていただきました。これは先ほどの保護者が自分の園について改めて知るという意味では、保育園の先生たちにとっても同じことが言えたのではないのかなと感じています。

このように、取材をする側にとっても、される側にとっても、いい保育園てどんなものなんだろうとか、自分たちの子育てはどうなんだろうということ、今を見詰め直す、考えるというきっかけになったということが今回のこの冊子の作成に当たりまして何よりも大きな収穫だったというふうに実感しています。

このように、情報というのは単なる通達のような一方通行のものではなくて、情報の受け手がその情報を受けたことによって、自分なりに適切に変換をして、それをまたさらに

反映させていくという、つまりフィードバックできるという、そういうものであるべきだということも学びました。

その他取材の過程で気づいたことの1つには、保護者同士がよく話をしたり、お互いを理解し合っていていい関係ができているというコミュニティができているという園に関しては、園の方も保護者たちのことをよくわかっていて、園と保護者という関係もとてもいいコミュニケーションができているということが挙げられます。その点から見ますと、今回の次世代育成支援計画の中で、区が大々的に掲げている多様な子育てサービスの充実という目標には、1つ大きな落とし穴があるというふうに思っています。

ここで、先ほどの情報というものを子育て支援に置きかえて考えてみたんですけども、今までの保育園を含めた行政の子育て支援というものは、提供する側と受け手の1対1の関係の中で、いかに利用する保護者が満足をするかという、満足を高めていくかということに焦点が当てられてきたんじゃないかと思っています。現在、確かに男女ともに就労環境が多様化しまして、それぞれが必要とする子育て支援の形というのが複雑化されているというのが現状なんですけれども、だからと言って、単に多様なサービスを提供しておけばよいという考え方は、逆に危険な社会づくりを促進するものになってしまうんじゃないかというふうに懸念しています。1対1という、こういう関係が百通りも二百通りもあってもそれぞれの関係がすべて満足を得るということはありませんし、逆にさらなる個別的なわがままとも言えるような要求というものの発生も助長していってしまうのではないかということも懸念しています。

例えば、家庭的な保育を行っている保育室では、お母さんたち父母会をつくって話をする機会を持ちなさいよ。情報交換をして、交流をして、もっと楽しく子育てをやっちなさいよというふうに働きかけてくれるんですね。これは、そうした働きかけというのは、保護者が壁をつくってひとりよがりな子育てに専念してしまうということにも歯どめがかかけられると思いますし、また保護者も育つということと同時に保育園ももっと一緒に育っていききたいという思いのあらわれなのではないかなというふうに感じています。

こういった点から、これからの子育て支援サービスというのは提供する側と受け手の1対1の関係では成り立たないということが言えると思います。

1つ目の提言として申し上げたいのは、子育て支援サービスは、それを利用する保護者同士がいかに交流を持って、お互いに助け合えるような関係をはぐくんでいけるのか、その媒体ともなるべきであるということです。本当にちょっと知り合えば、お迎え行ってあ

げるわよとか、そういう関係というのは意外と簡単に築いていけるものなんですね。そのきっかけがないというのが現状だと思います。

もう一つ重要な点として、あたかも子育て支援サービスというものが保護者のためのものであるかのように、利用する私たちでさえも錯覚しがちであるということですね。いかなる子育て支援も、今この目の前にいる子どもたちをいかに豊かに育てていくのかということが目的でなければ、これは子育てとは言えないと思うんです。そこを理解せずにさまざまな教育もどきや育児もどきが長年にわたって日本では行われてきていると思うんですが、それらの結果が、現在社会が抱えている問題として露呈しているというふうにも考えています。だからこそ、今ここできちんとその点を見つめ直さなければ今後もさらに過ちを繰り返して、ますます加速していってしまうのではないかと大変危惧しています。こういった視点というのが保育の質とか子育ての理念というものにつながっているのだと思います。

ある機会がありまして、新宿区の方に「保育の質って何だと思えますか」というふうに尋ねたことがあります。「保育園の時間延長や土日開所も保育の質なんです」とおっしゃったんです。これは明らかに間違いです。これは行政サービスの質であって、決して保育の質ではありません。もうここで既に取り違えちゃっているんだなということをそのとき実感しました。さらに、「子どもたちが毎日楽しいと言って通ってくれる安全な場所であること」とおっしゃいました。もちろんそうであってほしいんですけども、では、楽しいと言ってくれるのであれば、一日じゅう好きなテレビを見せておけばいいじゃないですかって、好きなお菓子を好きなだけ与えておけば済むことなんじゃないでしょうかね。何で食事は手づくりの物をとか、体を鍛えるために、健康な体をつくるためにたくさん体を動かしましょうというプログラムがつくられているんでしょうか。これは、今ぐずっている目の前の子どもをただ泣きやませるというためのものではなくて、やがてこの子たちが成人をしたときに、健康な心と体を持って、自信を持って社会で活躍して行ってほしいと、そういう願いがあるからなのではないでしょうか。

いろいろ痛ましい事件というのがすごくあると思うんですけども、神戸の痛ましい事件ですとか、昨年の長崎の悲しい事件ですとか、ああいった事件を犯してしまう少年たちの心がどうして育ってしまったんだろうといったようなことを行政で子育て支援を担うという方たち同士で真剣にお話をされたことはありますでしょうか。多分ないんじゃないのかなというふうに思ってしまうのが正直なところです。

今週発表をされた、幼稚園と保育園の一元化といった計画もまさに一方通行だと思うんです。また、次々と出される保育園の民営化や廃園などという計画というのは一体どんな保育の質とか子育ての理念ということが議論された中で出てきたんだろうということが全く私たちには見えませんし、響いてもこないというのが現状です。まして、計画の進む中で、保護者たちがそれらを話し合っただけで考え合うという時間は全く考慮されていません。そういった中で進められていくということがいつもがっかりさせられる点でございます。

2つ目の提言として申し上げたいのは、行政でまさに子育て支援サービスを担う方々に、新宿でどんな子どもたちを育てていきたいのかということをとことん話し合っただけでいいということではないです。そんな議論の結論というのはもちろん出ないと思います。ですが、私たちも含めまして、保護者も一緒に考えて話し合っただけでいいという覚悟は十分に持っています。ですから、議論のための場をどんどんつくっていきましょうというふうに思います。せめて、この新宿という地域からは、みずから不幸な選択をするというような子どもたちを決して育てないというくらいの決意を行政の方も保護者の方もともに持っていききたいというふうに思っています。

最後になりますが、今回のこのようなシンポジウムの機会をつくっていただいたことに大変感謝しております。こういったものを議論だけで終わらせずに具体的にどんな実践をしていけるのかというふうにつなげていくべきだと思っています。

例えば、市ヶ谷柳町で、毎年、子どもからお年寄りまで一体化となっていて行われているサンバカーニバルというのがあると思うんですが、これは児童館の先生がもともと立ち上げたものだとも聞いているんですけども、そのことによって、地域のお年寄りたちにも、子どもたちの日常や存在というものを知っていただくことができたり、実際に保護者が児童館へ足を運ぶという機会がとてふえたという、そういうふうになっています。これは、とても大きな功績ではないかと思っています。そういった実際の現場のすばらしい実践をしているような先生方のお話などもどんどん聞いて、実践ということに今後はつなげていきたいというふうに考えています。

話がいろいろそれでしたけれども、こうして私のような者が発言をさせていただくということも情報発信の一つだと思っています。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

コーディネーター(吉澤) ありがとうございました。

大変聞きようによっては厳しいご指摘でもあるかもしれませんが、まだこれからも非常に

考えなければならない提言があったかというふうに思いますが。

大変予定した時間も押しておりますので、ちょっとした休憩をとろうと思います。それで質問がございましたら、皆さんのお手元にございます質問用紙を出していただければありがたいなと思います。

司会 では、大変時間も押していますので、10分の休憩とお手元のプログラムには記載してございますが、5分間、ただいまから休憩をとりたいと思います。

質疑応答に使用いたします質問票はこの休憩時間に書いていただきまして、前に係員がおりますのでお渡しください。お手元のない方は客席に入りましたところの受け付けに用意しておりますので係員の方にお申しつけください。

では20時10分まで休憩いたします。よろしくお願いいたします。

午後 8時05分休憩

午後 8時10分再開

司会 では、ただいまから質疑応答の時間に入ります。

質疑応答は休憩時間中にいただいた質問表をもとにコーディネーターの吉澤先生に整理していただきながら進めてまいります。

では、吉澤先生よろしくお願いいたします。

コーディネーター（吉澤） 時間って全く早くたちますね。あと本当に限られた時間でございますが、皆様の質問票が大分集まっております。

皆さんにちょっとお断りしなきゃいけないなと思うのは、全部答えたら何時になるでしょうかなんて感じもしますので、質問をいただいたシンポジストが一応ごらんいただいて、それらを中心にお答えを含めてお話ししていただくというふうに思います。

ご了解いただけますでしょうか。あと限られた時間なのでそうせざるを得ないかなと思っているところです。一方的に申し上げて恐縮でございますけれども、後が迫ってお帰りの時間もございましょうから、そんなかたちにさせていただきたいというふうに思います。

では、先生からでもお願いしてよろしいですか。汐見先生。

汐見先生は、最初にお話しくださったものも含まれているかと思いますが、よろしく先生お願いします。

汐見 たくさんのご質問をいただきましたちょっと時間が余りないので答えられるものについて簡単に答えるという形でしたいんですが。

1つは、新宿の特徴という点で病院がたくさんありますと子育ての中で生かせないか、

連携できないかということでございます。

これは、とっても大事なことです。次世代育成の今回のプランづくりの中に、病院が子育て支援に積極的にもっと参画するという、そういうことを呼びかけるとか、あるいは期待するというようなことを入れなければいけないなということ強く感じています。

実は、私は別なところで同じようなことをやっているんですが、そこでも、そこにある総合病院の知り合いの医者と少し話をして、実は医者たちはそういう動きがあるということ余りよく知らないんです。ですから、ぜひ病院関係者にこういう今新しい施策づくりをしているので、病院側としても積極的に参画してほしいというようなことを呼びかけるような場、あるいは積極的にこちらから出かけるというようなことをやった方がいいなと改めて今思いました。生かせないかと書いてありますけれども、これは私たちの姿勢次第で生かせると思います。

それから、住民の声を聞きなさいということを経済に盛り込まれたわけですが、今の子育て世代は残念ながらそういうことに声を出すようには教育されていない世代です。今までの政治と教育はそういうふう育成したものを急に今度は参加しなさいと言っても、どうシステムをつくるのかのヒントをくださいということでもあります。

これは別に今までの世代と言いますか、今の世代がそうだということではなくて、日本の民主主義というのは、明治からずっと民主主義というのは名だけで、やっぱりどちらかというと行政が中心で、公というのは実はお上とも言うわけですね。私、幾つかの国が子育て支援をやっているのを聞いて、なるほどなと思うところが幾つかありました。

例えば、今回のイラクの問題がそうなんですけれども、若い世代だとかいろいろな人が行って、捕まって、それに対して自己責任論というのが出ましたね。それに対して、アメリカやフランスあたりから、そういう自己責任とかたちで当人を批判するということが驚いたという、考えられない批判だという反論が出ましたでしょう。要するに、アメリカのパウエル国務長官は、彼らは日本の国民の英雄だと、なぜそれを批判するのかというふうなことを言っていましたね。要するに何が違うのかということ、自衛隊を派遣するだとか支援するということは、日本の政府はそれは国がやることであって民間が勝手にやるなと、我々がやるのにいろいろ邪魔をするなというような感じの姿勢なんです。ところが世界中はそうじゃなくて、国がやることは限られている。それだけでは細かなことはやれないので民間の人たちが国にかわっているいろいろやってほしいと。だから市民が主体的に動くということは、国がさまざまな施策をするということとセットになってやっと実現するよ

うな大事な位置にあるんだという、これは欧米なんかではもう当たり前の考え方なんです。日本では相変わらず、大事なことは国がやるんだから勝手なことを市民がやるなというわけです。この姿勢の違いなんです。僕は、これをどう変えるか。

例えばカナダなんかではいろいろな子育て支援というのは、まずNPOたちが自発的に金もないような中でやり出して、そして頑張ってるって、そしてこれは公共性がある、公益性があるからぜひお金を欲しい、援助してほしいと言われて、書類をつくって、そして実際に調べたらそうだとということで、今度は行政が援助するという、大体そういうスタイルでやっている。まず民が動くわけです。そしてそれに対して官が応答するという感じなんです。

日本はまず、例えば新宿なら新宿区の行政マンがプランをつくって、そしてサービスを提供するというかたちがあるわけです。そういうかたちですと明治から来ちゃったわけです。だから、私たちいつも待っているんです。何かいいプランをつくってくれないかって。そういうやり方を今回少しもう変えようじゃないかと、民間がそれぞれ行政か何かやるかどうか知らないけれども、とにかくまずやってみよう。そして、これは新宿区に必要なんだということをまずわからせようじゃないかと、そういう形で動いていくということと、そういう動きを行政よくキャッチして、確かにあの動きは大事だから、できるだけお金が回るように何か支援しようというようにするとかという、そういう新しいコラボレーションをやらなければだめだと思います。

ですから、こういうご質問非常によくわかるんですけども、ここの質問の姿勢そのものが相変わらず、そういうシステムを行政がつくってくれるんじゃないかというふうに考えておられるんじゃないかという気がしてなりません。ですから、ひとつ違うんです。これを自分たちつくりたいんじゃないかと、そしてそれを行政の人たちを引っ張ってきて、認めなさいよというようなかたちでやるという姿勢が私たちにこれから必要ではないかというように思うんです。

それから、経済効率優先の構造改革路線の次世代支援では、社会はどうなるんでしょうか。格差不平等社会が広がれば、不幸な子どもたちが育ってしまうのではないのでしょうか。

ちょっとこのご質問の意図がよくわからないんですけども、構造改革路線というのが経済効率優先であるというようなことはいろいろな批判がされています。ただ、今回の次世代育成も大きな意味では子どもを育てる行政のあり方だとか、施策のあり方の構造を変えていくということ言えば構造改革の1つかもしれないですね。だけれども、それが必ず

しも経済効率を優先するというふうに今までやってきたのと同じ論理では言ってないわけです。

ですから、何ていうんでしょうか、実は国の役所の中にもさまざまな矛盾があるわけです。例えば、企業に対して、今度は厚生労働省は企業が次世代育成のためのプランをつくってほしいと、こう来るわけです。しかし、実際は企業の中にはこの不景気の中で、そんなことをやれるかというのがたくさんあるわけです。ですから、本当は、あの法律は義務規定にしたかったけれども、その抵抗が大きいからできなかったんだけれども、実は本当はできたら義務規定にしたかったというような本音を聞いたことがあります。そういう意味では、やっぱりもう一本矛盾があるわけです。今までのやり方ではだめなんだと。経済効率だけを優先しているだけでは、子どもを育てるといふ、お金にならないことを豊かに実現するという論理は出てこないということで、だから、少し表現が和らいでいますけれども、義務規定ではないんだけれども、しかし、企業はもう自分の会社で、例えば、3人目の子どもを生んだらボーナスを500万円差上げますとか、そういうふうなNTTかどこかは400万円出すんですかね。そういうふうなことを企業が今あれこれ決め始めています。実は企業は、ここでやったことないので、どういうふうにプランをつくっていいかわからない。それは、皆さん企業というときすぐ悪者みたいに思うかもしれませんが、実際には、企業の中で自分の社員が子育てをちゃんとやっていないような、家族をちゃんと守れないような、つくれないような社員はうちの会社ではそんなにいい仕事ができるとは思わないというような、そういう企業だって出てくる可能性は十分あるわけです。

実は埼玉なんかでは、企業が自分のビルを全部子育て支援に提供したところがあります。そういうようなところは少しずつ出てきていますわね。それは企業の生き残り戦略なんです、要するに。要するに子育てにやさしい企業という形でやらないともう住民もばかじゃないですから、そういうふうな形で、実際は矛盾している中でどういう声を突きつけていくのかということで僕は企業は十分変われると思います。そういうことを今回のあれでやり始めなければいけないんじゃないかということです。

それから、子育て支援、次世代育成支援と言いながら、行政はなぜ保育園の統廃合や民営化を進めるのか、言っていることと矛盾を感じます。行政の仕事で手放す必要はないと思いますが。

これは、僕に聞かれても困るんですけども、民営化と言った場合に、今回のプランの中で、行政責任というのはもちろんあるわけです。とりわけお金をしっかり出すと、税金

を上手に配分するという。そういうことをいわばどんどん放棄していくということになるのであれば、これは大いに批判しなければいけませんよね。ただ、全体として、さっき言いましたように、今まで保育園に対する支援が中心だったのが、今度は専業主婦に対する支援を含むわけです。つまり対象がうんと広がると当然お金はいっぱいかかるようになるわけです。そうすると、それだけの分、じゃあ今度はたくさんいるからと言ってお金をどこから持ってきて、ぱっとばらまけるかと言うと、それだけの予算はないわけです、実際は。これはすぐわかりますね。そうすると、どういうふうにお金を全体にうまくばらまくのかという、その知恵を実は住民自身もやっぱり探らなきゃいけない。さっき僕ちょっと冗談で言いましたけれども、子ども基金のようなものをNPOが始めるというようなことは本当にぜひやってほしいわけです。そういうかたちで今の新宿区がどういうふうにしてそういうことをやろうとしているのか僕は詳しくはわかりませんが、次世代育成と矛盾するようなことのない施策が実現するようなシステムというものを私はつくっていただきたいということを強く感じます。

コーディネーター（吉澤） ありがとうございます。

全く時間時間と言って恐縮ですが、司会者の役割とすればできるだけ上手にしていかなければいけないと思いますので、皆様のご質問の中で、今から質問をしていただいた方々から重要だというふうなことをご選択いただいてお答えいただくということで、一言二言になるかもしれませんが、それじゃあ岡崎さんから行きましょう。

岡崎 幾つかいただきまして、どれも全部多分重要だと思うんですが、すぐに答えられるものを選びました。

保護者のつながりをつくろうと思うとき、一番壁となっているものは何だと思いますか。

これは、今、うちの子どもたちが卒園した保育園では、意見箱というものが設置されていたり、きょうは早番とか、遅番の先生はこの先生ですよというような写真が飾られたりというふうにしてすごくオープンな感じ、そして意見交換ができるような場所を1歳から5歳までいるどの子どもたちも通るげた箱のところに設置していただいたりしています。私は、何軒か引っ越しを新宿の中でしてきたので、全部で4園経験しているんですけども、そういうものが設置してある園というのは初めて経験しています。

保育園の例えば保護者をとると、お迎えに行くとか、朝登園するというような時間帯はまちまちなので、その時間帯にたまたま顔を合わせるお母さん同士、お父さん同士じゃないと全く知らない、子どもの顔は知っていても親の顔は知らないといったような現状です。

取材をしている中でも、働いているお母さんたちは忙しいんだから父母会なんてなくていいじゃないですかと。学校に行ってからやりなさいよというふうにおっしゃる園長先生とかも実際いらっしゃいまして、そういう視点という方がやっぱり多いのかなというふうに感じます。実際に私も上の子が保育園にいるときは面倒くさいから父母会なんてなくてよかったと思ったのが正直なところなんですけれども、実際に小学校に上がってみると、通り一つ向こうのところにこんなに子どもたちがいたんだという、同じ同級生の子たちがこんなにいたのにどうして今まで会ったことがなかったんだらうというくらい知らなかったんです、子どもの存在を。そういう、もうそもそもそういう交流自体が全くなかった。保育園の中に通っているということが地域の中である意味孤立していたというふうにすごく感じました。実際に小学校に入って、いざPTAを見ると、みんなほとんど幼稚園のお母さんたちです。幼稚園のお母さんたちというのは、やっぱり幼稚園のころからそういうPTAの活動とか、そういうものになれている、そういうふうに参加するというのが、足を運ぶのが当たり前というような体制ができているのかなというのすごく感じるんです。そういう視点が、今のあれにはないのかなというところがあります。

あとは、子育ての活動を通していろいろな児童館ですとか、地域センター、社会教育会館といったようなところを渡り歩いて、集まって、やっぱり土曜日、日曜日ですね、集まるのは。みんな子連れで集まって、じゃあ隣に公園があるから子どもを遊ばせながら話ができるねなんていうふうに集まったりするんですけども、「ここはヨガもやるお部屋なので物を食べてはいけません」。子どもを連れて3時間、4時間過ごすとは、やっぱり飲み物を飲ませたり、おやつを食べさせたりということは絶対に必要というか、もう不可欠の状態なんですけれども「物を食べるのはやめてください」と言われるので、お花見に使うような大きいシートを持参しなきゃいけなかったりとか「このプレールームは3歳までしか利用できませんから大きい子は入らないでください」と言われたりとか、例えば、家庭支援センターが併設されている児童館にも日曜日に集まったことがあるんですけども、「ここは子どもが遊ぶところなので大人は集まってこういうふうにしてもらおうと困ります」と委託のシルバーさんなんですけれども、言われちゃうんです。「こっちの赤ちゃんは上に家庭支援センターがありますからあっちに行ってください。でもきょうは日曜日なので休みですから平日に来てください」とか、もうそういう集まったりする、うちは小学生の子がいて、片や赤ちゃんがいてという、そういう保護者同士が気軽に集まれるという場所もないというのが現実です。そういったこともすごく壁になっているかな。多分だから、保育園

であるとか、そういう子育て支援という担い手の方もその時間そこにいる子どもの時間さえ充実していればいいんじゃないかという、そういう視点しかないんじゃないかなというふうに思います。それがすごく大きな壁じゃないかなと思います。

コーディネーター（吉澤） ありがとうございます。

既に時間になりましたですが、工藤さん、一言。上手に使っておまとめください。

工藤 それでは、私のところは2つ質問が来ているんですけども、一人の方はちょっとたくさんいろいろ書いてくださっているんですけども、提案として、健診とかでフォローが必要なご家庭を拾っていくと出会えていくんじゃないかなと、多分そういう趣旨ではないかなと思うんですけども、このことに関しては、保健センター、四谷の保健センターさんとは保健センターさんでちょっとフォローが必要かなと思うご家庭のお母さんに対して、広場の方に遊びに行っておんなさいよという、声をかけていただくような流れはできています。実際、ちょっと発達相談の方にもつながったりとかして、お母さんとお話をして、初めていらしたときに保健センターから紹介されましたというようなこともありまして、ただまだ数は少ないので、やはりそういう連携を密にとっていくことがこれからも必要だと思います。

それで、あともう一つこの方がおっしゃっているのは、出産から就園をして、それから、小学校に上がっていくという中で、連続した局面での支援がぶち切れているというのが問題ではないかというようなご提案もいただいているんですけども、まさに、私ども地域子育て支援センターがそういうものをつないでいくような存在に今後なっていければいいなというふうに思っております。まだちょっと設立されて1年目でして、そこまでなかなか皆さんと連携がとれてないんですけども、ぜひそれはやっていきたい仕事だと思っています。

もう一つのご質問につきましては、ひろばの運営について教えてくださいということなんですけれども、もしご興味がある方がいましたら、これが終わった後で、私、ロビーにでもいますので、多分、もう時間も押していますので、このことにつきましては、聞きたいことを具体的に聞いていただければ答えたいと思いますのでよろしくお願ひします。

コーディネーター（吉澤） 新宿区内の施設の職員でいらっしゃいますから、いつでもまたということもあるんじゃないかと。

工藤 それと遊びにいらしていただいてもいいので、ぜひふたばひろばにも来てください。

コーディネーター（吉澤） ありがとうございます。

それでは、一言お願いします。

石井 本来、私には質問票が来てないので、しゃべる権利はないんですけども一言最後にしゃべらせてください。

コーディネーター（吉澤） そんなことないですよ。どうぞ。

石井 今回やってみて、まだ途中経過なのであれなんですけれども、私、立場上はファシリテーターという立場なんですけれども、先ほどお見せした資料、プレゼンテーションは、すべて参加されている皆さんの意見であるとか、言ったことだけなんです。本当にそういう一つ一つ立場の違う人が集まって何かを一つするという、そういうつながりというのがとてもよく感じられて、すばらしいなというのが本当に感じています。

私事なんですけれども、僕の妻がつわりで苦しいと言っているときに、パソコンのインターネットの画面に向かって相談をしているわけです。相談というか、見て「わかるわかる」とかとひとり言を言っているわけです。なんかそんな姿を見て、やっぱり僕今の世代というのは、つながりというものがなくていけなくなってきているのかなというのは思います。だから、僕もファシリテーターの仕事として、あと残り3回ということを残して終わってしまうんですが、もし、参加されているメンバーがよしと言ってくれるならば、今後も僕もかかわらせていただきたいなと思っています。もちろん僕がかかわるということは、プラス僕のゼミにいる、クラスにいる学生もともにかかわらせていただけたらいいなと思っています。

普通、保育園や何か施設がうまく開設して、うまくいくまでには、3年から5年ぐらいかかると思うんですけれども、このモデル事業は、とりあえず3年というところを目標にしていますので、何とか3年間という長い間でひとつ結果を出せたらいいなと思っています。

どうぞよろしく願いいたします。（拍手）

コーディネーター（吉澤） ありがとうございました。

やっぱり時間時間と言いたくなってしまうんですが、一応終わりたいと思いますが、最後に申し上げておきたいというのは、今、汐見先生も大分お話くださいましたが、私のところには、こういったひろばだとか、会話のきっかけをどうやってつくるか、もう少し具体的にということでございますが、これから地区別にこの素案をもとに皆さんのご意見や懇談会を持とうとしておりますので、ぜひそういうところをうんと活用していただきたいということを一言申し上げておきたいというふうに思います。

皆さんのきょうのシンポジウムの中でのお話は、点から線へ、線から今度は面にしてい
くという、この動きの中の一つかなという感じがいたします。その面にするというのは、
先ほどのコミュニケーションの問題もありますね。ですから、そういうことで、お互いが
心しないとこれはできないと思うんです。「心しないと」っておわかりでしょうか、子育て
ばかりじゃないと思います。子育てをきっかけにしながら、いろいろな地域のお互いの住
民の相互関係を、そして支え合うという状況をつくっていかなきゃならない。だからある
意味では、地域づくり、あるいは雰囲気づくりだろうというふうな形をつくることの大事
さがここで語られたかなというふうに思っております。

これからは、また、その地区の声を聞きながらということでございますので、とりあえ
ず、皆さんのお手元にあるというか、皆さんごらんになっていただいたと思いますが、今
回できている素案を中心にしながら、より深めていく、より使いやすくしていくと言いま
しょうか、そういう場づくりをつくっていく。ある意味では、システムと言うと大げさで
すが、そういう雰囲気ができることがまず第一だろうというふうに思います。

今回は、そのきっかけづくりというぐらいな点でご承知おきいただいて、これからどう
ぞ声をどんどん寄せていただくことを期待して終わりたいと思います。

ちょっと超過をいたしまして恐縮でございました。半までというのにちょっと遅れまし
たことをおわびしながら、大変ふつつかな司会で皆さんにご迷惑をかけたと思いますが、
終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

司会 吉澤先生、汐見先生、石井さん、工藤さん、岡崎さん、本日は本当にありがとうござ
いしました。皆様もう一度発言者の皆様に拍手をお願いいたします。(拍手)

本日のシンポジウムは、これをもちまして終了いたします。

本日、時間の関係上、語り足りない分は来週から始まります地域懇談会にご参加いた
だき補っていただければと思います。懇談会の日程は、本日お渡ししております配付物の中
にございます。また、計画のタイトルも皆様から公募しておりますので、よろしくお願
いいたします。

また、お帰りの際には、配付物の中にございますアンケートにご協力いただければと思
います。アンケートは出口のかごで回収しております。

では、本日はまことにありがとうございました。(拍手)

午後 8時38分閉会